

Title	海外先端技術企業でのインターンシップで実践力を練磨
Author(s)	桑原, 裕
Citation	年次学術大会講演要旨集, 30: 55-58
Issue Date	2015-10-10
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/13224
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

海外先端技術企業でのインターンシップで実践力を練磨

○桑原 裕 (GVIN and ams)

はじめに

筆者は、益々日本がグローバル化していく世界の中で、リーディング・ロールを果たしていくためには、若いうちに、世界の仲間と仕事をし、一緒に汗を流し、国籍を超えて、仲間を作っていくことが、どうしても必要であると思う。日本独自で、世界の覇者になるということもある程度必要かもしれないが、中心的な力点は、世界の国々と連携して、共に勝ち組になることであると思う。筆者は、著書「異文化と出会おうーオンとオフで暗黙知ネットワークを広げる」(2012年3月刊行：丸善プラネット)の中に、“日本の発展を願って”という節で、このことを、やや詳しく記した。

折しも、2012年秋に、東京大学が「特別休学制度」を設置して、学生を海外に派遣するという新聞記事(日経)を見たのである。これは、東大生が海外に行かなくなったのを、当時の浜田学長が問題視し、危機感を抱いて設置した新しい制度であった(2012年10月の日経記事による)。そこで、筆者は、筆者が日本代表をしている、オーストリアのアナログASIC設計・製造会社ams社(通称オーストリア・マイクロシステムズ社)で、東大生を受け入れられるかどうか、確認した。ams社では、実は、東大の新聞発表以前に、筆者が記した本に、社長や経営幹部が共鳴し、日本から、インターンシップ学生を受けたいと思っていたのである。

ある先生に、東大との仲介の労をとっていただき、早速東大とams社は話し合いを開始した。東大とamsとの話は、とんとん拍子に進み、ついに、2013年度に、東大から、正式に3名のインターンシップ学生がグラーツのams本社に派遣された。

2013年インターンシップ

さて、2013年の東大・amsインターンシップは、短期1人、長期2人とした。応募者は、この10倍程度あったが、小さくスタートして成功させたいという強い願いがあり、このような小規模からスタートしたのである。

オーストリアのグラーツで、東大生たちは、一様にその異文化環境にかなり驚いたらしい。そのうちの一人である内田直樹君によれば、グラーツの宿舎で、欧州の外国人同僚と生活し、大変仲良くなった。週末、ウィーンやザルツブルクなどのオーストリア内は勿論のこと、ユーゴやイタリアやその他の国々にも行ったようである。グラーツ近辺は地域的に安全で、セキュリティもしっかりしているので、インターンシップ学生たちは、のびのびと生活できた様子である。

内田君はamsでは、気圧センサー等のセンサーの開発を手伝った。写真はこれを示す。

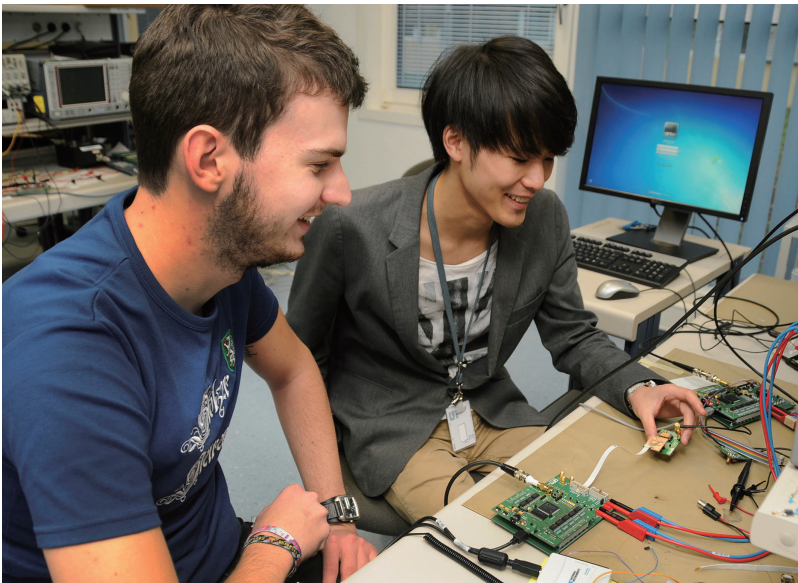


写真1：指導者とセンサーの開発を行っている内田直樹君

2013年には、志水 彰太君もグラーツで一年強、仕事をしている。彼は、半年間、グラーツ工科大学のインターンシップと兼務であった。2013年4月からはamsに専心してインターンシップを開始した。

2014年に、グラーツのams本社で、“Urban Mobility, Smart Energy and Healthcare”という国際シンポジウムを開催した（そのチェアマンは筆者だった）。このテーマは、一言で言えば、“自動車の自動運転”である。車の将来に極めて感性のある志水君は、このams側の担当者として活躍した。ams社の多くのものが、志水君のきめ細かい適切な配慮に感心した。ただ、志水君は、日程の関係で、シンポジウムの直前に帰国せざるをえなかった。

更に、2013年には、もう一人の長期滞在者・本田祐輔君がいる。本田君は約10か月amsに滞在し、2014年6月に帰国した。2014年の長期滞在の問題について、東大とamsが打ち合わせを持った時は、彼も参加し、いろいろな改善案を積極的に提案した。



写真3 グラーツでの国際シンポジウム

2014 年インターンシップ

2013 年のインターンシップの経験を踏まえて、2014 年インターンシップが開始された。2013 年の反省点は下記の通りである。

- (1) 短期インターンシップでも、1 ヶ月はあまりに短い。ams としては 3 ヶ月滞在してほしい。
- (2) ams での仕事を見つける手続きを早める。本人に真に合った仕事を見つけるには、時間がかかる。
- (3) 長期のインターンシップは、大学院生、学部でも 3 年生以上であってほしい。

これらの点を東大と打ち合わせ、100%合意とはいかないまでも、できるだけ双方が協力して頑張ることにした。

結局、2014 年度インターンシップは、下記の通りとなった。

短期	東大生	2 人
長期	首都大学生	1 名

本来は、東大の長期インターンシップ学生は 4 人採用するはずであったが、一呼吸置いたことになった。先にも述べたように、2014 年 10 月に、グラーツの ams 本社で、国際シンポジウムを開催した。首都大学の平田一寿君は、グラーツ着任後 1 週間程度であったが、車の将来に極めて強い関心があり、このシンポジウムに参加し、大きな刺激を受けた。



写真 2：東大インターンシップ生との会食（2015 年 8 月）

2015 年インターンシップ

一方、ams は、2015 年度に日本にデザインセンターを設立することを決定した。現在そのためのリクルートを本格的に進めている。2015 年中に 20 人に、最終的には 30 人規模を考えている。詳細は省略するが、実は、このデザインセンター設立も本インターンシップが大きな原動力になっている。将来は、インターンシップ体験者が、このデザインセンターで働くという構図も成り立つのである。しかし、デザインセンターとしては、国内の大学から、国内インターンシップ学生を募集し、この中から真に採用する人材を決める。この“ドメスティック・インターンシップ”に合格した者は、国内のデザインセンターで、夏一か月間研修を受けるのである。このいわば“ドメスティック・インターンシップ”は、実質的な採用直結型インターンシップであり、実益が伴う。

この“ドメスティック・インターンシップ”と、もっと広い意味での、従来型のインターンシップ（国際インターンシップ）との棲み分け、協力体制が、今後非常に重要になる。これを、現在鋭意検討・推進中である。

実際には、国際インターンシップの方は、2015 年度は、

短期	東大生、早稲田学生	2名
長期	早稲田学生	1名

となった。

こうして、インターンシップは、“国際インターンシップ”、および“ドメスティック・インターンシップ”へと発展的に、拡大している。曲がりなりにも、創設以来3年目で、やっと軌道に乗ってきた。

結論

“国際インターンシップ”は、長期的なグローバル社会への貢献である。また、広い意味で、会社のグローバル戦略・経営に寄与するものでもある。また、“ドメスティック・インターンシップ”は、採用という面で、やはり国際的に、国と国との連携樹立に大きな役割を果たしている。今後、日本がグローバル社会で積極的な役割を果たしていくには、こうした、インターンシップ制度を、学生が積極的に活用し、グローバル社会で活躍できる“タフ”な人材に育ててほしいと、切に願う。

参考文献

- (1) 桑原 裕「異文化と出会おうーオンとオフで暗黙知ネットワークを広げる」2012年3月 丸善プラネット)
- (2) Yutaka Kuwahara, “Deepening Relationship between Austria and Japan: ams Internship program with Japanese Universities, Todai and Shuto University” Symposium on Urban Mobility, Smart Energy and Healthcare at ams near Graz on 7th October 2014
- (3) Yutaka Kuwahara, “Practice of Open Innovation”, Development Engineering, Vol.21, 2015